大賞
ナイスバルク!

因幡脩
いなばしゅう
イラスト：那知上陽子

【シナリオ概要】
新型コロナウイルスの感染状況が小康状態を保っている 2022 年 10 月。探索者たちは友人のフリーライター、青木が待つ別府へ温泉旅行へと出かけることとなる。
地元在住の青木の案内によって、観光初日は非常に楽しいものとなるだろう。しかしその夜、探索者たちは筋肉質な怪物の手によって青木が惨殺されるところを目撃してしまう。
探索者は、友人の遺したメモや怪物の顔を手掛かりに調査を進める。怪物の顔は、テレビ番組にも多く出演している、有名ボディービルダーの村上鉄人にそっくりだったのだ。
調査の末に、探索者は山岳信仰と仁王伝説の残る里、国東市へとたどり着く。そこで開催される小規模なボディービル大会に、なんと村上が出場するらしい。ニョグタの落とし子として覚醒しつつある村上は、そのボディービルイベントを利用して、ありえべからざる邪神を召喚しようとたくらんでいるのだ。
探索者はボディービル大会において、怪物の弱点である光、戦闘技能、あるいは美しい筋肉を駆使して、ニョグタの落とし子に引導を渡さなければならない。

舞台は新型コロナウイルスの感染状況が小康状態を保っている2022年の10月、大分県の別府周辺である。久々の温泉旅行へと出かけた探索者は、仁王伝説をめぐる神話的事件に巻き込まれてしまう。探索者は知恵と勇気、あるいは筋肉をもって異形の怪物に立ち向かわなければならない。

1. はじめに

このシナリオは“新クトゥルフ神話 TRPG ルールブック”（以下“ルールブック”）と“新クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンストロルム Vol.1 クリーチャー編”（以下“クリーチャー編”）に対応しており、探索者 4 人向けにデザインされている。プレイ時間は探索者の作成を含まずに 4 時間程度だろう。

探索者たちは休日に誘い合わせて、大分県の別府へ温泉旅行に出かけることになる。また、別府在住の青木丈という友人が、現地で案内役をしてくれることになっている。

2. キーパー向け情報

ボディービルダーの村上鉄人は、自らの肉体にいらだっていた。加齢と共にシミが目立ち、厳しい鍛錬を課しても思うように筋肉がついてくれなくなったのだ。それでも年齢を考えればいまだトップレベルなのだが、ストイックな彼は妥協をよしとしなかった。若さあふれる肉体に憧れてやまない彼は、科学的トレーニングに見切りをつけ、オカルトに傾倒していった。そして、近くの国東（くにさき）半島がかつて修験道の盛んな地であったことを知った彼は、愛する妻と別居し、単身山ごもりをすることを決意した。

だが、村上には自らも知らない出生の秘密があった。彼はオクラホマの地で食屍鬼にさらわれた日本人女性旅行者と、ニョグタ（“ルールブック”327 ページ）の間に生まれた落とし子（“クリーチャー編”116 ページ）だったのだ。彼が衰えだと感じていた肉体の変質は、実は落とし子として覚醒しつつあることの表れであった。また、彼が国東半島へ執着し始めたのは、かつてその地で部分的に顕現し、調伏された邪神に、知らず知らずのうちに呼び寄せられていたからなのである。

山ごもり中に落とし子として覚醒した村上は、地元のボディービルイベントに出場し、出場者や観客を生け贄として邪神にささげようとしている。イベントホールを現代の「洞窟」に見立てた儀式が成就してしまえば、大分の地に再びありえべからざる邪神が顕現してしまうだろう。

3. 主なNPC

村上 鉄人(50歳)／ボディービルダー

「別府のアイアンマン」の異名を持つボディービルダーで、テレビ番組にも多く出演する地元の有名人。別府市内で妻の泰子と「ムラカミジム」を経営している。ストイックな性格のほか、愛妻家としても知られている。

APP 50　SIZ 80

変わり果てた村上、ニョグタの落とし子

呪文以外の詳細は“クリーチャー編”116ページの「ニョグタの落とし子」を参照。能力値は平均値を用いること。
呪文：ニョグタの招来、不浄なる呪詛、墓地へのキス

村上 泰子(42歳)／鉄人の妻

夫と経営するジムでインストラクターを務めている。スポーティーではつらつとした女性だが、シナリオ開始時点では夫の身を案じて気弱になっている。

STR 60　CON 65　SIZ 60　DEX 70　INT 45
APP 65　POW 40　EDU 40　正気度 40　耐久力 12
DB：＋0　ビルド：0　移動：8
技能：経理　50%、応急手当　60%

青木 丈(30歳)／フリーライター

別府在住で、探索者の友人。観光情報を得意とするライターだが、収入が少なくアルバイトで生計を立てている。ゴシップ記事執筆という不慣れな仕事を受けたことが仇となり、怪物と化した村上に襲われて死亡する。

APP 65　SIZ 60

黒子寺
別居先の家
くにさき文化会館
大分空港
豊後高田市
国東市
中津市
宇佐市
杵築市
日出町
玖珠町
地獄めぐり
別府市
別府湾
別府駅
遭遇現場
ムラカミジム
青木のアパート
九重町
由布市
大分市

大分県 マップ

4. シナリオの導入

2022年の10月。探索者たちは休暇を取り、大分へ温泉旅行に出かけている。昼前に別府駅へ到着した探索者を、現地在住の友人である青木が自家用車で出迎えてくれる。青木は夜に取材の仕事があるらしく、この日同行できるのは夕方までとのことだが、せめてそれまではと案内役を買って出てくれたのだ。彼は行く先々で観光情報を提供してくれ、記念写真も撮ってくれる。また、「今日の夜にでも行ってみれば?」と、行きつけの居酒屋も教えてくれるだろう。

青木によると、自然に噴き出す源泉を間近に見られるという「地獄めぐり」が別府観光の定番なのだそうだ。青木の案内のもと、探索者は美しいコバルトブルーの「海地獄」や、真っ赤に染まった「血の池地獄」など、各地に点在する不思議な光景を堪能することができる。その道中、青木はこの辺りの源泉が「地獄」と呼ばれる由来について話してくれる。

『豊後国風土記（ぶんごのくにふどき）』という奈良時代の書物によると、この辺りは千年以上前から熱泥が噴き出していて、とても人間が立ち入れない「地獄」として忌み嫌われていたそうなんだ。こうして観光客が訪れるようになったのは、実は明治時代以降なんだよな。人為的な温泉の掘削技術が発達した結果、「地獄」から湯けむり立ちのぼる「天国」になったってわけだ。今、オレうまいこと言っただろ？

青木の言うとおり、手すりの向こうでは熱泥が沸騰してボコンボコンと泡立ち、感染対策のマスク越しにも硫黄と泥の臭いが強く感じられる。探索者は、この熱泥が辺り一面に広がるかつての「地獄」に思いを馳せるかもしれない。

探索者たちが楽しい時間を過ごしていると、いきなり空から鳥のふんが落ちてきて、青木の肩に付着する。探索者がはやしたてると、青木はうんざりした様子で「またか……最近、どうもついてなくてさ。昨日なんて、車のブレーキが故障して、あわや大惨事というところだったんだぜ」とこぼす。

また、探索者が仕事、あるいは翌日以降の予定について話題にすると、青木は顔を曇らせて「実はちょっと仕事がうまくいってなくてね。もし明日以降に合流できるようなら連絡するよ」と答える。心配した探索者が彼からさらに詳しい状況を聞き出すには、〈言いくるめ〉〈魅惑〉が必要となる。

成功した場合、青木はバッグから一冊の雑誌を取り出し、表紙を探索者に見せてくれる。それは『月刊トップビルダー』というボディービル雑誌だ。表紙には「不屈のアイアンマン」という見出しと共に、モストマスキュラーポーズ（肩や腕の筋肉を強調するポーズ）を決める男性の写真が掲載されている。〈知識〉に成功した探索者は、テレビ番組にも出演している有名ボディービルダー、村上鉄人の存在を知っているだろう。青木は「まだ内緒なんだけど、今度別府在住の有名人としてこの村上鉄人さんを扱うことになったんだ。でもオレ、ボディービルには詳しくないからさ……」と話す。

実は、青木は探索者に対してうそをついている。彼には取材の予定など入っていない。彼はここしばらく村上の別居先周辺で張り込んでいたのだが、食事の宅配が途絶えたのを見て、村上がいなくなったことに気づいた。この日の夜、青木は気を取り直してムラカミジムを見張るつもりでいる。〈心理学〉に成功すると、まるで隠し事をしているかのような後ろめたさが浮かんでいることに気づくが、それ以上のことは「守秘義務があるから」と答えてはくれない。

5. 別府の夜

その夜、青木と別れた探索者は、市内の旅館にチェックインをしてから居酒屋へと繰り出すことになる。探索者は青木イチオシのお店で、だんご汁やとり天といった大分名物をつまみに楽しいお酒を満喫することになるだろう。

22時ごろ、少々飲み過ぎた探索者が風情のある夜道を歩いて旅館へ帰っていると、辺りで何かがピカピカッと光ったような気がする。しばらくして、脇道のほうから走るような足音と「助けてくれ!」という男の声が聞こえる。明らかにただごとではなさそうだ。

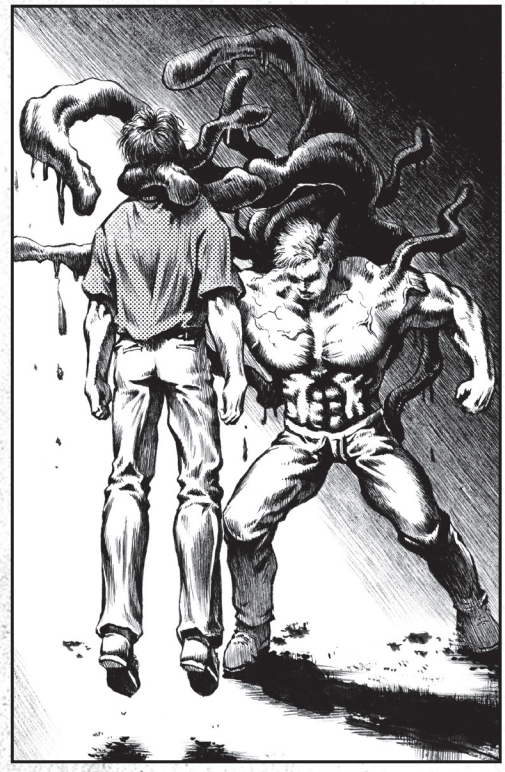
探索者が駆けつけると、川沿いの小道に灰褐色の肌をした上裸の怪物が立っていた。一見して人間のようだが、ただ筋肉質というには異常なほど全身が膨れ上がり、前へ張り出した左右の大胸筋は生き物のようにうごめいている。肥大した両肩にはメロンのごとく血管が浮き上がり、はっきりと六つに分かれた腹直筋はまるで部屋の間取り図のようだ。さらにおぞましいことに、怪物の体からは黒い粘液を滴らせる触手が伸び、一人の男性を軽々と宙に吊り上げている。犠牲となっているのは青木である。青木の体は奇妙にしぼみ、ぶらぶらと力なく垂れ下がっている。異形の怪物と友人の死を目撃した探索者は、1／1D6正気度ポイントを失う。

背後からは、悲鳴を聞きつけてやって来る通行人の足音が（探索者が通報しているのならパトカーのサイレンが）聞こえてくる。それに気づいた怪物は表情をゆがめ、何かをつぶやく。その瞬間、探索者たちは怪物の真

紅の瞳に釘付けになり、背筋の凍るような感覚に襲われる。まるで自分の身に何かよからぬものがとりついたように感じられるだろう。また、ここで〈知識〉に成功するか、青木から『月刊トップビルダー』の表紙を見せてもらっている探索者は、目の前の怪物の顔が村上鉄人によく似ていることがわかる。

動揺する探索者を尻目に、怪物は体を液状化させ、青木の死体をつかんだまま脇の小川から逃げ去ってしまう。それから通行人などが駆けつけてくるが、通りにはすでに探索者の姿しかなくなっている。探索者が酔っぱらっていることに気づいた彼らは「人騒がせな」とあきれて去っていく。

探索者が見た怪物の正体は、村上鉄人本人である。ニョグタの落とし子に変異しつつある村上は、妻の姿を遠目から見て、離婚届を自宅の郵便受けに投函して立ち去るつもりだった。せめて最愛の妻だけは自らの狂気に巻き込みたくなかったのだ。しかし、そこには青木が張り込んでいた。青木は、村上のこそこそと人目を忍んでいる様子を見て、「後ろ暗いことをしているに違いない」と決めつけ、慌ててその瞬間を撮影した。突然フラッシュの光を浴びた村上は、人間の姿と精神を保てなくなり、落とし子としての姿が露わになってしまった。それを見て狂気に陥った青木は悲鳴を上げながら逃げたものの、追いつかれて殺害されてしまったのだ。



6. 新しい呪文《不浄なる呪詛》

怪物と化した村上は、呪文《不浄なる呪詛》を探索者に放ってから逃げ去っている。目撃者全員の口を封じる時間的余裕はないと判断し、せめて足止めになればと考えたのだ。

この呪文は《邪眼》(“ルールブック”243ページ）のバリエーションであり、呪文をかけられた瞬間から、探索者たち全員の〈幸運〉の値が2分の1になる。また、選択ルール「幸運を消費する」(“ルールブック”95ページ）を採用していた場合、必要とする〈幸運〉ポイントの消費量が2倍になってしまう。キーパーは、探索者それぞれの元の〈幸運〉の値と、今後消費する〈幸運〉ポイントの量をメモしておくこと。

この呪文の犠牲者は不幸体質となり、なにかと不運が降りかかる。青木が「最近ついていない」とこぼしていたのもこの呪文の影響だ。別居先周辺を張り込んでいたとき、青木はうっかり村上と目が合ってしまった。妙な追跡者をわずらわしく思った村上は、この呪文で牽制しようとしたのだ。

この呪文による不運は「自動販売機から飲み物が出てこない」「犬のふんを踏んでしまう」など、進行に影響のない範囲でよい。積極的に行動した結果ひどい不運にみまわれるのでは、プレイヤーが探索者を動かしにくくなってしまうからだ。あまりしつこくなりすぎないよう留意しつつ、探索者が解決に乗り出すための危機感を演出してほしい。

7. 青木の遺した証拠

怪物が川へと姿を消したのち、路上には青木のトートバッグとカメラが落ちている。バッグの中身は自宅の鍵、車のスマートキー、名刺入れ、カメラの替えのレンズ、モバイルバッテリー、モバイルルーターだ。財布や携帯電話などは、遺体と共に川へと引きずり込まれてしまったのだろう。

探索者が落ちているカメラのデータを確認するなら、気になる写真を発見する。撮影時間はつい先ほどであることから、夜道が光ったのはこのカメラのフラッシュによるものだと推測できるだろう。その写真には、黒いロングコートにマスク姿の男が、建物の裏口らしき場所にある郵便受けに、何かを直接投函する瞬間が収められている。連続してシャッターを切ったらしく、カメラのほうを振り向いて驚く男の姿がコマ送りのように撮影されている。写真の男は村上鉄人によく似ているが、マスク越しに見える顔はやけに黒光りしているように感じられる。

川辺から移動する際、〈目星〉に成功した探索者は、

路上に黒いロングコートが落ちているのを発見する。コートを拾い上げるなら、内側は悪臭を放つ黒い粘液にまみれていることに気づく。また、イクストリームで成功した場合、首元や袖口に粘液とは異なる茶色い何かが付着していることにも気づく。これはボディーペイント用の塗料だ。村上はスライム状の体を覆い隠すべくロングコートを羽織り、茶色い塗料を顔や手に塗りたくって人の姿に偽装していたのだ。

8. 青木の家

探索者が名刺入れの中を確認するのであれば、青木の名刺に自宅兼仕事場の住所が記載されている。

青木の自宅は、市内の集合住宅の一室だ。無人の部屋には、本棚と引き出し付きのデスクがある。本棚には、大分県内の郷土資料が多数収められているが、特に気になるものはない。デスクの上にはノートパソコン、手帳、雑誌が置かれている。引き出しの中には、多種多様なアルバイトの給与明細が入っており、青木の厳しい経済状態が窺えるだろう。

スリープ状態のパソコンの中には多くの文書ファイルが保存されている。ほとんどが観光情報の記事だが、1つだけ執筆中の原稿がある。その原稿は「村上鉄人、不倫相手と夜のトレーニング」という見出しだけで筆が止まっているようだ。また、〈図書館〉に成功した場合、加えて『週刊DRAW』というゴシップ誌の編集部とやり取りをしているメール履歴を見つけることができる。内容は村上鉄人のスキャンダル記事の執筆依頼だ。青木は当初はこの畑違いの仕事に難色を示していたようだが、「使える記事を書いてくれたら、成功報酬に加え、ライターとしての仕事を斡旋する」という条件に釣られて、しぶしぶ引き受けることにしたようだ。

手帳には「村上、ジムを離れて別居。一瞬だけ姿を見せた。目が合った。失敗した。ピザの出前。量が多い。やはり愛人？」という走り書きと共に、国東市の住所が書かれている。雑誌は『週刊DRAW』と『月刊トップビルダー』の2冊だ。『週刊DRAW』にはめぼしい記事は見つからない。『月刊トップビルダー』は青木が日中持ち歩いていたもので、中には村上のインタビュー記事（プレイヤー資料1）が掲載されている。

——村上さんは年齢無差別の部門に出場され続けていますが、年齢別の部門には出場されないのでしょうか。
村上「今は考えていないね。確かに年々体が作れなくなっているけど、できるだけ無差別にこだわりたいんだ」

——別府のアイアンマンでも年齢の影響は感じますか。
村上「もちろん。肌のハリもなくなったし不調も多い。衰えを日々痛感しているよ。だから、若い参加者のみずみずしい筋肉には、つい時間を忘れて見ほれてしまうんだ。それは自分が失ってしまったものだからね。でも、美しい肉体は弛まぬ努力の末に宿るものだ。諦めないで抗い続ける気持ちがあれば、きっと筋肉の神がほほ笑んでくれると信じているよ」
（ナイスバルク！ プレイヤー資料1「村上のインタビュー記事」）

9. ムラカミジム

怪物の顔を確認した探索者は、村上鉄人について調べようとするかもしれない。村上は有名人であるため、インターネットで検索すれば、別府で「ムラカミジム」というジムを夫婦で経営していることがすぐにわかる。また、地元の人々に村上のことを尋ねるならば、ムラカミジムの存在とおしどり夫婦の評判は自然と話題にのぼるだろう。「昨晩の現場周辺を歩いて、写真の建物を探す」という行動も有効だ。

ムラカミジムは1階がフィットネスジム、2階が村上家の住居となっている小さな建物だ。正面のドアには村上鉄人がほほ笑むポスターが張られている。なお、写真に写っていた裏口には、スポーツジムの看板などはかかっていない。

中に入ると、化粧気のない女性が「見学希望の方ですか？」と声をかけてくる。この女性は村上鉄人の妻、泰子だ。泰子はにこやかに対応するが、村上鉄人の話題を出すと「すみません、夫とは離れて暮らしておりまして……」と顔を曇らせる。適切な技能ロールに成功するか、カメラに残された写真を見せるのなら、泰子は事情を打ち明けてくれる。

■　夫と別居したのは半年くらい前のことだ。夫はここのところ肉体の衰えに悩んでおり、科学的トレーニングやサプリメントにもさしたる効果を感じていないようだった。

■　夫は年齢無差別の部門に出場し続けているのだが、次回の全国大会を最後に引退すると話していた。年齢別の部門への出場も勧めたが、首を縦に振ろうとしなかった。

■　別居したのは夫婦仲が悪化したわけではなく、夫が山ごもりをすると言いだしたからだ。近くの国東市は修験道の修行場として有名で、そこでの自然派トレーニングに興味を惹かれたらしい。私は反対したが、現役最後のわがままということで、最終的には夫の意思を尊重した。

■　しかし、1週間前に行なわれた全国大会の予選に、夫はエントリーすらしていなかった。心配して連絡を取ろうとしているのだが、何度試みても応答がない。

■　今朝、判の押された離婚届と、すべての資産を私に譲渡する旨の手紙が郵便受けに入っていた。驚いて夫に電話したのだが、やはりつながらない。今日はパーソナルトレーニングの予約が入っているため、別居先を直接訪ねるわけにもいかず、どうしたものかとやきもきしている。

■　写真の男性は間違いなく夫だ。肌が黒光りしているのは、ボディービル用の塗料かもしれない。近くに来ていたのなら、せめて顔だけでも見せてほしかった。

泰子は思いがけない手紙を前に弱り切っている。探索者が代わりに様子を見に行くことを申し出るのであれば、泰子は深く感謝し、夫の別居先の住所を教えてくれる。

ここで〈目星〉に成功した探索者は、ボディービルのトロフィーや賞状などが飾られた棚にある、写真立てに注目することができる。そこには、広大な平原を背景に仲睦まじく寄り添う夫婦が写っている。泰子に尋ねれば、数年前のアメリカ旅行のものだと教えてくれる。村上鉄人はオクラホマの雄大な自然が大層気に入ったようで、旅行中「懐かしい感じがする。まるで故郷のようだ」と口にしていたそうだ。

10. 村上鉄人の別居先

村上鉄人の別居先は、大分県北東部の国東市にある。別府からの所要時間は、公共交通機関で片道2時間ほど、レンタカーで移動するのであれば片道1時間ほどだ。

（コラム）鬼が仏になった里、くにさき

国東半島では、古来より鬼の存在が信じられてきた。霧と瘴気（しょうき）が立ち込める山中の、人間が到底踏み入ることのできない岩峰にぽっかり空いた洞穴を見て、人々は「鬼の棲みかに違いない」と畏れを抱いたのである。

このような厳しい自然の中に棲む鬼を、古代仏教の僧侶たちは不思議な法力を持つ憧れの対象として捉えた。僧侶たちは鬼の姿を探して険しい山中に「岩屋（いわや）」と呼ばれる修行場を作り出し、そこでの修行を盛んに行ってきた。やがて異形の鬼は仏の化身として神聖視されるようになり、「六郷満山（ろくごうまんざん）文化」と呼ばれる独特の山岳宗教文化が栄えていった。そんな六郷満山文化を象徴するのが寺社の守護神たる仁王像であり、全国の約8割の石造仁王像が国東半島に集中しているという。

2019年、「六郷満山の峯入りの道」は「歴史の道百選」に選ばれることとなった。同年、起伏に富んだ地形を生かした「仁王輪道」というサイクリングコースも策定され、新たな観光資源として期待されている。

国東市は人口3万人ほどの自然豊かな里だ。市内を歩いている最中、探索者は町の掲示板に、のど自慢大会や図書館での読み聞かせ会などの告知に交じって、「くにさきボディービル大会」というポスターが張られていることに気づく。このポスターは電柱や店先など、そこかしこに張られているが、すべてに「別府のアイアンマン、村上鉄人電撃参戦！」というシールが上から貼られている。大会は地元のジムが会員向けに開催する小規模なもので、架空の公共施設「くにさき文化会館」で開催されるようだ。ポスターによると、開催日時は翌日の10時で、その2時間前に会場で申し込めば、ジム会員以外でも無料で飛び入り参加が可能とのことだ。

探索者が村上の別居先の住所を訪ねると、そこは国東市中心部から少し離れたところにある借家である。窓の向こうはすべてカーテンによって覆い隠されているが、不用心にも玄関の引き違い戸には鍵がかかっていない。

カーテンが閉め切られた家の中は暗く、照明のスイッチを入れても反応しない。照明器具からランプがことごとく取り外されているのだ。家中の床や壁には黒い粘液が飛び散っており、強い異臭を放っている。この異様な室内の光景を見た探索者は0／1正気度ポイントを失う。

家の中にはあまり物がないが、宅配弁当や宅配ピザのゴミが目立つ。それを見た探索者は、一流ボディービルダーの食事としてはあまりに似つかわしくないものだと感じるだろう。そのほか、インターネットショッピングの空き箱も大量に転がっている。探索者が伝票を確かめるのであれば、「ボディーペイント用塗料」「ボディービル用カラーリング」「男性用香水」といった品々であることがわかるだろう。その近くに捨てられている広告チラシ数枚の裏には、汚い字で書き殴られた手記が残されている（プレイヤー資料2）。

国東市に来てから、毎晩どこかから声が聞こえる。体の変色もひどい。私は人間ではない何かになりつつあるらしい。
泰子、ごめん。私の狂気に君を巻き込むわけにはいかない。
ああ、あの声だ だれだお前は 仁王？ ぐた？
おれを呼んでる やまのなかの くろこでら？ そこの？

ああ このにくたいはすばらしい おもいのままだ
もう あんなつらいとれーにんぐなど ひつようない
におうをふたたびこのちに いあ！いあ！ におうぐた！
（ナイスバルク！ プレイヤー資料2「村上鉄人の手記」）

村上鉄人は、落とし子への変異に伴い、耐え難い食欲に苛まれた。そこで、配達人と顔を合わせなくてもすむ「置き配」によって食料を調達したのだ。また、人間に擬態するための塗料や香水も同様にして入手している。ただし、のどかな里にあっては出前に対応している店が限られており、このような村上の態度は「顔も見せずに大量かつ頻繁に出前を取る住人」として、近隣店舗の従業員から不気味がられている。

11. 黒子寺

村上の手記を発見した探索者は、「くろこでら」について調べることだろう。ただし、インターネットで検索しても有益な情報は得られない。「くにさき文化会館」併設の地元の図書館、もしくは別府に戻って青木の部屋の郷土資料で調べるのなら、車で20分ほど行った先の山中に、かつて「黒子寺」という寺があったことがわかる。廃寺になって久しいようで、観光名所にはなっていない。調査の過程で、詳しい住所のほかに寺の成り立ち（プレイヤー資料3）についても調べられるだろう。この一連の調査には〈図書館〉ロールに成功すれば2時間、失敗すれば4時間かかるものとする。

その昔、力自慢の黒兵衛という男がおった。黒兵衛は「おらは黒き仁王に力を授かったのだ」と盛んに触れ回り、むやみに大岩を割ったり壁に大穴を開けたりするので、村人からは疎まれておった。いつも崖に空いた岩穴で暮らしており、風呂にも入らん。その臭いはすさまじく、黒兵衛の姿を見ると村人は「やれ、臭う様じゃ、臭う様じゃ」と鼻をつまんで逃げまどうのが常じゃった。

そんなある日、日照りに悩まされた村人が「力自慢のお前といえど、お天道様が相手じゃどうすることもできまい」とからかうと、黒兵衛は「なんの、おらが射落としてやろう」と弓を携えて山に登った。果たして、矢を向けられたお天道様は、反対にその光で黒兵衛をからからに乾かしてしもうた。さすがに哀れに思った村人たちは、供養のために岩穴のそばに寺を建て、「黒子寺」と称して丁重に弔ったそうな。
（ナイスバルク！ プレイヤー資料3「黒子寺の成り立ち」）

山道は舗装されているため、黒子寺付近までは車で乗り入れることができる。ただ、目的の住所まであと少しというところで、その道は途切れてしまう。探索者は車を降り、道なき道を進んでいかなくてはならない。

しばらく歩くと、こけむした石段に突き当たる。石段の先には、崖を背後にして建つ古ぼけた本堂がうっすらと見えている。探索者が石段を登りきると、境内はしんと静まり返っており、心なしか空気がひんやりと冷たく感じられる。本堂は分厚い木製の扉で閉ざされており、鉄の取っ手に巻きついた頑丈な鎖と南京錠で封じられている。南京錠を外すのには〈鍵開け〉が必要だ。ただし、本堂自体が朽ち果てつつあるため、壁には穴が空いている。探索者が乱暴に蹴破るなどすれば、扉や壁は容易に破壊することができるだろう。

本堂の中は荒れ果てており、なんともひどいありさまだ。天井の一部が崩れて破片が床に散らばっており、長らく人が立ち入った形跡はない。ここで〈目星〉に成功した場合、瓦礫の中から『如倶多民談記』という古文書の切れ端を発見する（プレイヤー資料4）。これを解読して大意をつかむには、ハードの〈母国語（日本語）〉ロールに成功する必要がある。

かつて大分県東部地方は、闇と泥を司る神を崇拝する一族により支配されていた。洞穴に棲まうその神は「如倶多（にょぐた）」と呼ばれていたらしい。由来はわからないが、恐らくもともとはよその国の言葉なのだろう。その神から加護を与えられた者は、強烈な悪臭をまき散らす怪物のような姿になることと引き換えに、闇の中においては絶大なる力を得られるという。その一族が支配する「地獄」は江戸時代まで続いたが、旅の行者によって、このおぞましき一族は日の下に引きずり出され、調伏せしめられたそうだ。その後、仁王信仰と結びついたことにより、かの神は「仁王倶多（におうぐた）」と呼称が変化することとなったが、もはや信奉する者も少なく、時の流れと共に忘れ去られていった。
（ナイスバルク！ プレイヤー資料４『如倶多民談記』要約）

これを読んで大分の「地獄」の真実を知った探索者は、0／1正気度ポイントを失い、〈クトゥルフ神話〉を1ポイント得る。

探索者が寺の背後にある崖に注目するか、〈目星〉に成功すると、その崖に小さな洞窟を発見することができる。また、〈追跡〉に成功した場合でも、最近草が踏まれた跡をたどってその洞窟を見つけることができるだろう。

洞窟は井戸状に開口している縦穴で、底からは腐臭混じりの生温かい空気が漂ってくる。懐中電灯で照らすと、深さは5mほどだとわかる。縦穴のそばの岩には、環状の金具が打ち込まれている。その横には鎖がとぐろを巻いて置かれていることから、もともとはその鎖が金具に取り付けられ、下に垂らされていたのだろう。鎖は頑丈な造りだが、先端が砕けていて金具に取り付けることができない。この穴を下りるためには、何らかの工夫が必要となるだろう。もし誤って落下した場合は、耐久力に1D8ポイントのダメージを受ける。ただし、〈跳躍〉に成功すれば受けるダメージは2分の1で済む。

■ 〈鍵開け〉で外した本堂の扉の南京錠を利用すれば、鎖と金具をつなげることで安全に下りることができる。

■ 〈登攀〉に成功すれば、ロッククライミングの要領で下りることができる。ロールに失敗すれば落下してしまう。

■ 上に残る者が鎖を持ち、ほかの者がそれにつかまって下りる場合、引っ張る者のSTRと下りる者のSIZで対抗ロールを行なう。引っ張る者が敗北すると、鎖を持つ全員が落下する。

■ 衣服を結びつけてロープ代わりにするなら、〈グループ幸運〉ロールを行なう。失敗すれば強度が足りず落下してしまう。

洞窟の底に降り立つと、横穴が奥へ続いていることがわかる。広さ、高さ共に奥へ進むのに支障はない。しかし、奥からはたとえマスク越しでも吐き気を催すほどの悪臭が漂っている。それはもはや瘴気というべきもので、奥へ進むほどに濃く、強くなるのだ。この瘴気に耐えて進むには、CONロールに成功する必要がある。失敗した者は気分が悪くなってしまい、引き返すことを余儀なくされる。

悪臭に抗って奥へ進むと、行き止まりになっている。そこには子どもの背丈ほどの仁王像がある。その像は筋骨隆々というだけにとどまらず、触手のようなものが生えたおぞましい造形をしている。また、その表面はてらてらと光る黒い粘液によって覆われている。そして、洞窟内に漂う瘴気は、まさしくこの像から発せられているのだ。この冒涜的な像を目撃した探索者は、1／1D6正気度ポイントを失う。

探索者は、目の前の仁王像を放置しておいてはいけないと本能的に感じるだろう。幸い、像は木製であるため、破壊することは容易だ。また、日の光が当たる場所に像を移動させた場合でも、時間はかかるが破壊することができる。像が破壊されると、洞窟内に充満していた瘴気は消えていく。

〈知識〉もしくは〈歴史〉に成功した探索者は、仁王は「二王」とも呼ばれ、阿形（あぎょう）と吽形（うんぎょう）の二体が対になっていることが多いと知っている。仁王像の横には妙にスペースが空いていることから、ここにはもう一体像が置かれていたのではないかと思い至るだろう。

この仁王像は、ニョグタの信奉者が造り出したアーティファクトだ。邪神はこの二対の像を通じて、異界から現世に影響を及ぼしている。仁王像のもう片方は、すでに村上鉄人が運び出している（「14. ナイスバルク！」参照）。

12. さまざまな調査

「くにさきボディービル大会」事務局への聞き込み

地元の会員制ジムが主催する「くにさきボディービル大会」は、参加費無料で優勝賞品もサプリメント詰め合わせというごく小規模なイベントだ。村上からは3日前に突然参加を希望する旨の電話があったそうで、事務局の人間も「どうして村上さんほどの方が、こんな身内向けのイベントに突然出てくれることになったんだろう」と首を傾げている。

村上自身、大規模なイベントのほうが多くの生け贄をささげられると考えている。しかし、カラー剤を直接肌に塗布することが禁止されていたり（会場を汚す恐れがあるため、現在では公認サロン以外でのカラーリングは禁止の大会が多い）、事前にドーピング検査の実施があったりと、変異した体で出場するには障害があまりに多かった。そのため、村上は参加条件の緩い大会を探すほかなかったのである。

『週刊 DRAW』編集部への問い合わせ

『週刊 DRAW』編集部は東京都千代田区の出版社の中にある。この編集部は村上のネタについて、穴埋め記事のストックになればいいという程度にしか考えておらず、問い合わせても得られる情報はない。記者を派遣せず現地の青木に声をかけたのは、旅費や滞在費を浮かせるためなのだ。

懐中電灯の入手

怪物を打倒する鍵が光にあると推測し、懐中電灯を買い求める探索者もいることだろう。通常のものであればロールの必要もなく購入できるが、災害用の強力な懐中電灯や投光器などを入手するには〈グループ幸運〉に成功する必要がある。また、通常の懐中電灯を改造して光量を上げようとする場合、〈電気修理〉に成功しなければならない。

ボディービル大会会場の下見

「くにさき文化会館」の開館時間は午前9時～午後8時だ。大会前日は催し物がないため、ホールや会議室で得られる情報はない。この時点では大道具庫も空っぽである。唯一、有意義な探索が可能なのが照明・音楽調整室だ。ここは普段施錠されているため、侵入するには〈鍵開け〉が必要となる。中は無人で、照明や音響の操作卓やケーブル類が置かれている。そばにはマニュアルがあり、1時間ほどかけて熟読すれば、操作卓の仕様を把握することができる。

13. 大会開催前

大会当日に「くにさき文化会館」を訪れると、玄関前ではスタッフが入館者の体温の計測とアルコール消毒を行っている。また、搬入口にはトラックが止まっているのが見える。

エントランスホールにはプロテインやポージングパンツ等を販売する出店があるほか、大会2時間前までは飛び入り参加を募る受付も設営されている。探索者が参加を希望するなら、[STR と APP の平均] のロールにハードの難易度で成功する必要がある。失敗すれば、スタッフは「そりゃ誰でも参加可能ではあるけど、真面目にやってるほかのビルダーにも失礼だし、恥をかくだけだから」と諭すように言い、参加を受け付けてくれない。ロールに成功したなら、出場を希望する探索者は係員によって楽屋に案内される。

以降、施設の各箇所について述べるが、大会に出場しない探索者のみが調べられる箇所には●マークを、出場者のみが調べられる箇所には★マークを付して示す。

ホール●

何の変哲もないイベントホールである。大会前にはスタッフによる照明や音響のテストが行なわれている。緞帳は開いているが、ステージ上ないしステージ付近に人の姿はない。観客席にはえんじ色の座席がずらりと並んでいる。感染対策のため、座席には一つおきに×マークの札が置かれており、ソーシャルディスタンスが確保されている。ここには開始1時間前からちらほらと観客が訪れはじめ、30分前には多くの観客がつめかけることになる。観客席の後ろには小さな倉庫があり、掃除用具や修繕道具が入っている。

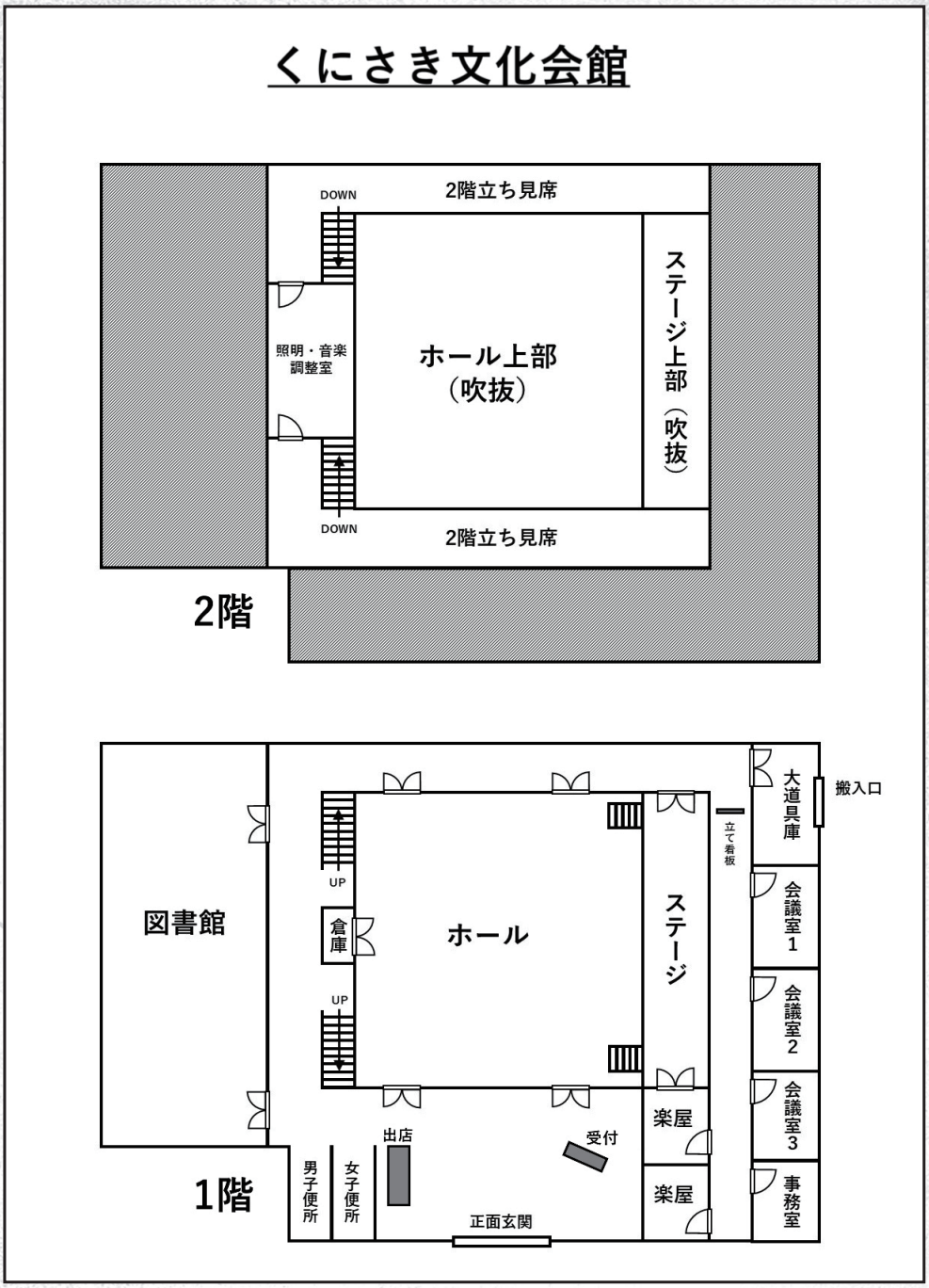
大道具庫●

舞台装置などを収納するための倉庫だ。施設内の鉄製のドアは施錠されているため、侵入するには〈鍵開け〉が必要になる。また、外には搬入口があり、大会前には業者が機材を運び込んでいる。翌日に行なわれるのど自慢大会のためのステージ機材を運び込んでいるのだ。搬入口から庫内へこっそり侵入するなら〈隠密〉、スタッフを装って侵入するなら〈変装〉もしくは〈言いくるめ〉が必要になる。大会30分前になると、業者は作業を終えて搬入口を施錠する。

大道具庫の中には、カラオケの機材やケーブル類に交じって、床置き用のLED投光器が1個置かれている。ステージ上の出演者を下方向から照らす演出に使用するためのものだ。この投光器を探索者が前もってステージ脇に運び込んでおいても、スタッフは特に気に留めることはない。

照明・音楽調整室●

当日の照明・音楽調整室は施錠されていない。中ではスタッフ1名がリハーサルを行っている。話しかけても「部外者は立ち入り禁止だ」と追い出されてしまうが、見学を希望するなどして〈言いくるめ〉か〈魅惑〉に成功すれば、スタッフは気をよくして操作卓について解説してくれる。ただし、その場合でも本番前には追い出されてしまうだろう。



くにさき文化会館 マップ

楽屋★

男女別の楽屋だが、男性用の楽屋に村上の姿はない。ここでは出場者がヨガマットを広げ、食事をしたり音楽を聴いたりしている。大会１時間前になると、出場者は皆ポージングパンツ（女性はビキニ）を着用し、パンプアップ（筋肉を一時的に膨らませるためのトレーニング）を始める。

会議室★

会議室１の前の廊下には「関係者以外立ち入り禁止」という立て看板がある。また、会議室１と２のドアは換気のために開け放たれており、中には大会のスタッフの姿が見える。探索者がここを通りかかったなら、本番前にも関わらず、スタッフたちが落ち込んでいる様子であることに気づく。

探索者が理由を尋ねると、スタッフは事情を話してくれる。今朝、スタッフたちは村上に歓迎の意を示すべく、サプライズの花束を準備していたそうだ。しかし肝心の村上が現れないため、連絡を取ってみようと玄関から戻って来たところ、着替えもカラーリングも済ませた村上が廊下に立っていたという。慌てて専用の控室に案内しながら手違いを詫びると、村上は「そうとは知らなかったものだから、ほかの出場者と一緒にさっさと受付してしまったんだ。気が利かなくて申し訳ない」と笑って許してくれたそうだ。

もちろん、この言葉は方便だ。すでに人ならざる体に変質している村上は、受付で体温を計測されるわけにはいかなかった。また、人間に擬態するためのボディーペイントが、アルコール消毒によってはげ落ちる恐れもあった。そこで、前夜のうちに体を液状化させて侵入し、人間への擬態を済ませると、そのまま施設内で眠らぬ夜を過ごしたのだ。

会議室３は村上専用の控室だ。内側から施錠されており、ノックをしても「集中したいから邪魔しないでほしい」以外の答えは返ってこない。たとえ探索者が泰子を連れてきて説得したとしても、ドア越しに「大会後にゆっくり話をしよう」とだけ告げられる。そのうちスタッフが飛んできて、「これ以上村上さんに粗相のないようにしてほしい」と注意されるだろう。なお、通常はかなわないことだが、なんらかの方法で侵入した場合、村上は体表を塗料でコーティングした状態であるため、懐中電灯などを向けても効果はない。

事務室★

この施設の職員が管理業務を行なうためのオフィスだ。ここには特にめぼしいものはない。

14. ナイスバルク！

本番が始まると、司会者の呼び込みと共に出場者がステージ上に並ぶ。ポージングパンツのみを身につけた筋骨隆々の男たちが、白い歯を見せて笑顔を浮かべる光景は圧巻だ（女性出場者はステージ脇で出番を待っている）。観客席からは「仕上がってるよ！」「キレてるよ！（筋肉の筋や溝が美しいという意）」といった特徴的な歓声が飛んでいる。

しかし、全員その場で静止してポージングを披露する段取りであるにもかかわらず、突然村上鉄人がステージ中央へと歩みを進める。それと同時に２階から小さく悲鳴が聞こえたかと思うと、スポットライトがすべて消え、ホールは薄暗さに包まれる。１階客席にいる探索者は異変を感じて２階の照明・音楽調整室へと向かうかもしれない。キーパーはここで十分に間を取り、探索者の行動を確認すること。

困惑する会場内をよそに、村上はモストマスキュラーポーズを決めて「見よ、神が与えたもうた肉体の美しさを！」と叫ぶ。いつの間にかひと回り大きくなったような圧倒的な肉体の迫力に、観客たちは思わず息をのむ。村上はほかの出場者を見やると、「君たちは幸せ者だよ。偉大なる神の顕現の礎となれるのだからな！」と恍惚の表情を浮かべる。

しかし次の瞬間、ピシリという音がして村上の体表を覆う塗料がひび割れ、強い異臭を放つ黒い粘液が一気にあふれ出す。村上は目を見開いて「こんなはずでは……うつくしいわたしのからだは……」とつぶやきながら、そのゼラチン状の粘液にのみ込まれてゆく。残ったのは、触手をうごめかせる巨大な不定形の黒い粘液とでもいうべき醜い姿だ。もはや人型とはほど遠い形状の体内には、仁王像らしきものが埋め込まれ、融合している。完全に変異したニョグタの落とし子を目撃した探索者は、1／1D10 正気度ポイントを失う。

怪物となり果てた村上は、うめき声をあげながら触手を伸ばし、周囲の出場者を包み込もうとする。そのとき、狂気に陥った泰子がステージに駆け上がり、怪物と化した夫を自ら抱きしめようとする。彼女は夫の出場を SNS で知り、急遽会場に駆けつけていたのだ。この日の泰子は、化粧をしてフォーマルな外出着に身を包み、観客席の最前列にいた。スポーティーなインストラクター姿しか知らない探索者が、事前にその存在に気づくことは難しいだろう。

怪物は愛する妻を包み込み、じわじわとその命を奪っていこうとする。それはさしずめ死の抱擁とでも言うべき光景であるが、泰子は目を閉じ、抵抗する様子を見せない。

また、会場内は変異した村上が放つ異常な悪臭に包まれる。観客席の探索者はハード、マスクをつけられないステージ上の探索者はイクストリームのCONロールを行ない、失敗した場合はすべての行動にペナルティー・ダイス1つが与えられる。ただし、事前に鼻栓などマスク以外の対策をしていた場合、難易度はレギュラーにまで下がる。2階にいる探索者には悪臭が届かないため、このロールを行なう必要はない。

探索者によって黒子寺の仁王像が破壊されている場合、ここで後述「自慢の筋肉を見せつける」の〈心理学〉ロールを行なわせる。以上の処理を終えたのち、キーパーは戦闘ラウンドの開始を告げること。なお、引き寄せられた状態から戦闘が開始されるため、泰子は1ラウンド目から包み込み（“クリーチャー編”117ページ）のダメージを受け始めることになる。

1階で迎え撃つ

ここまでの調査で、探索者は光が怪物の弱点であることをつかんでいるだろう。懐中電灯などを照射する場合、判定はDEXロールで行なう。通常の懐中電灯は1D3ポイント、災害用の懐中電灯は1D8ポイントのダメージを与えられる。大道具庫の投光器を使用する場合、災害用の懐中電灯と同じ扱いとする。なお、怪物が応戦できる距離を超えて光を照射した場合、威力が減衰するためダメージは与えられないものとする。

なお、ニョグタの落とし子には物理的な攻撃も有効であるため、通常の戦闘で対処することも可能だ。選択ルール「狂気のひらめき」（“ルールブック”165ページ）を採用しているなら、狂気に陥った探索者にはそれがわかるかもしれない。

照明・音楽調整室へ向かう

ステージのライトが消えると同時に、照明・音楽調整室にいたスタッフは悲鳴を上げながら逃げ出す。探索者が2階に駆けつけると、照明・音楽調整室の中にはうつろな目をした青木の死体が立っており、襲いかかってくる。青木のゾンビを目撃した探索者は1／1D8正気度ポイントを失う。

ここにいるのは、《墓地へのキス》（“ルールブック”238ページ）によって村上に粘液を注ぎ込まれ、ゾンビと化した青木の成れの果てだ。村上から体を液状化する能力を受け継いだため、ドアの隙間や換気口などから人知れずこの部屋に侵入することができたのである。能力値などは“ルールブック”335ページの「ゾンビ」の項を参照すること。

操作卓はケーブルが引きちぎられている。ステー

ジのライトが消えたのはこれが原因のようだ。予備のケーブルから適切なものを接続し直すには〈機械修理〉もしくは〈電気修理〉が必要になる。ただし、事前にマニュアルや見学によって操作卓の仕様を把握していた場合はボーナス・ダイス１つが与えられる。修理を試みる探索者は、ゾンビの攻撃に対して回避も応戦も行なうことができない。なお、戦闘ラウンド開始後に観客席やステージから照明・音楽調整室へ移動するためには、［11 －探索者の MOV］ラウンドかかるものとする。

ケーブルをつなぎ直した探索者は、ステージ上の怪物にスポットライトを集中的に浴びせることができる。強烈な光を浴びせられた怪物は即座に打倒されるだろう。それと共にゾンビも動きを止め、やがてちりとなって消えてゆく。

自慢の筋肉を見せつける

黒子寺の仁王像を破壊している場合、邪神の影響力が弱まり、怪物はわずかに村上としての心を取り戻しつつある。〈心理学〉に成功すると、怪物がしきりに出場者の肉体に視線をやっていることから、鍛えあげた肉体を見せつけることで、注意を引くことができるのではないかと思いつく。

大会に出場している探索者が STR ロールに成功すれば､怪物は｢おお……美しい……｣と感嘆の声を上げ、1D3 ラウンドの間動きを止める。まやかしの外見などではなく、地道な努力の末に結実した筋肉に見ほれてしまうのだ。出場者以外はポージングパンツ姿ではないためこのロールを行なうことはできないが､〈言いくるめ〉などに成功すれば、ステージ上にいる NPC の出場者に代理で行なわせることができる。NPC の STR は 70 だが、漂う悪臭によりペナルティー・ダイス１つが与えられる。この〈言いくるめ〉には１ラウンドかかり、NPC に STR ロールを行なわせるごとにロールする必要があるものとする。

村上を説得する

黒子寺の仁王像を破壊していたとしても、通常は怪物と化した村上に対して〈説得〉を行なうことはできない。ニョグタによる支配の力のほうが上回ってしまうからである。

唯一､村上を説得する鍵となるのが泰子の存在だ。探索者の中には、泰子と連絡を取り合い、彼女と共に会場を訪れる者もいるだろう。その場合、ステージ上に駆け上がろうとする泰子との DEX 対抗ロールに勝利すれば、とっさに彼女を引き留めることができる（狂気に陥っている泰子には、悪臭によるペナルティー・ダイスは適用されない）。引き留められた泰子は、ステージ上の夫に涙ながらに訴えかける。この状態であれば、探索者による〈説得〉が可能だ。成功した場合、村上は自我を取り戻す。ただし、それはニョグタの加護を自ら拒絶することを意味するため、彼の体は崩壊していく。

なお、黒子寺の仁王像を破壊していない場合は、泰子の存在をもってしても村上を説得することはできない。

15. 結末

ニョグタの落とし子を打倒できれば、体内の仁王像も破壊される。それと共に、村上鉄人の体は急速に萎んでいく。もはや骨と皮だけの体になった村上は、ステージ上で妻を強く抱きしめる。それは愛ゆえの抱擁だ。その後、彼は「せめて最期はスポットライトを浴びながら逝きたい」と探索者に懇願し、まばゆいばかりの光の中でちりとなっていく。

黒子寺の仁王像を破壊しているのなら、泰子が死んでしまったとしても邪神の招来は未遂に終わる。生け贄が足りないためだと考えたニョグタの落とし子は、さらなる生け贄を求めて死ぬまで暴れ続けるだろう。

もし黒子寺の仁王像を破壊しておらず、泰子が命を落としたのなら、その犠牲をもって邪神がこの世に顕現する。もはや探索者に逃れるすべはない。大分はかつての地獄の再来となり、熱泥と闇が支配する不毛の地と化すだろう。

ニョグタの脅威から大分の地を守ることができた探索者は 1D10、泰子が生存しているなら追加で 1D6 正気度ポイントを獲得する。また、〈幸運〉ポイントを開始前の値に戻し、そこから本シナリオで消費したポイントの２分の１を差し引く（つまり本来の消費量として精算する）。